

CMIM NEWS

Center for Minority Issues and Mission

Spread the Tent of Inclusivity! 共生の天幕を揚げよう!

第三号
ユース・フォーラム
増補報告編

2017年11月25日発行

〒169-0051 新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 52 号室 TEL : 03-6228-0509 E-mail : info@cmim.jp URL : http://www.cmim.jp



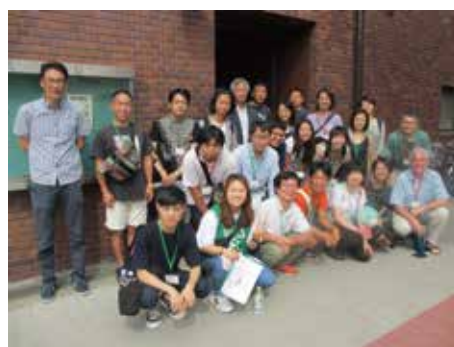
リトル沖縄といわれる大正区を歩いた



琉球の音楽に屋間から踊った



身体を使って言葉を越えた「ことば」を表現した



コリアタウンにある KCC 会館の前で

主催：マイノリティ宣教センター
Center for Minority Issues and Mission in Japan

fieldwork

第1回

マイノリティユースフォーラム in 大阪

The 1st Minority Youth Forum in Osaka

Theme
志題

We are individuals,
but not alone.

fieldwork

私たちがひとりだ、
でも孤独ではない

September 3 (Sun) - 6 (Wed), 2017
2017年9月3日(日)～9月6日(水)

Korean Christian Center 在日韓国基督教会館
2-6-10 Nakagawa-nishi, Ikuno-ku (K.C.C./大阪市生野区中川西2-6-10)
Osaka, Japan

このマイノリティユースフォーラムは、以下の目的で開催されました。

- ①現代社会におけるマイノリティに対する差別問題の現状やその背後にあるものを学び、問題解決のためにできることを、それぞれの場から考える。
- ②現状ではさまざまなマイノリティグループが日本社会の中で孤立させられていることをふまえ、様々なグループ・コミュニティを横断するエキュメニカル・ネットワークをつくる。
- ③このフォーラムの場では、様々な背景をもつ青年が集い、お互いの経験や思いを分かち合い、共通の課題を協議し共有していく。
- ④そのために、マイノリティ・コミュニティの現場を訪問し、当事者の証言を聴き、またワークショップを通して相互理解・問題解決の方途を学び、フォーラム後の取り組みを継続する。

これは、フォーラムに集ったさまざまな背景をもつ若者たちが、見て、聴いて、語りあったことの断片の記録です。



スケジュール

9月3日(日)	
16:00	受付
17:00	開会礼拝(石橋真理恵さん 在日大韓基督教会)
18:00	オリエンテーション
19:00	夕食 おいしいコリアンフードのお弁当
20:00	全体会①朝治武さん(リバティ大阪館長)による講演
21:30	晩の祈り(証言1)
9月4日(月)	
8:30	朝の祈り(証言2)
9:20	フィールドトリップ① 金城宗和さんを旅先案内人にお招きして大阪に沖縄の人々が住み着いた由来とコミュニティアイデンティティの歴史を考えた。
14:45	フィールドトリップ② 戦後の闇市からコリアタウンへ。ヘイトを受ける街の過去・現在・未来を考えつつ鶴橋市場を歩いた。
16:30	全体会②ふりかえり
18:00	夕食(ふつうのお弁当)
18:45	全体会③金耿昊さん(近現代史研究者)によるレクチャー。「人類館」事件について、多くの画像資料を通して、1903年に大阪で起きた事件と、現代の差別がいかに切り結ばれているかを考えた。
20:30	晩の祈り(証言3)
9月5日(火)	
8:45	朝の祈り(証言4)
10:00	フィールドトリップ③ 大阪第4朝鮮初級学校を訪問した。朝鮮学校の現状と併せて、ヘイトスピーチに対する裁判の話も聞いた。
11:30	フィールドトリップ④ コリアタウンのまちづくりにかかわるNPO法人「クロスベイス」を訪ね、闇市からの歴史を重ねてきたコリアタウンがいま何を目標しているのかを聞いた。
14:30	全体会④ ワークショップ① 演劇ワークショップを通して、見て、聴いて、話したことをディスカッションしながら身体を通して表現してみた。
17:00	全体会⑤ ワークショップ② 目に見えない差別や偏見を考えるためにドイツの教育現場で活用されている教材を使って、わたしたちの日常を検証した。併せて教材の日本での適用についても考えた。
19:00	パーティ・交流会
9月6日(水)	
8:30	朝の祈り(証言5)
9:00	全体会⑥ ふりかえり+ステイトメントづくり
11:45	晩の祈り(証言6)+閉会礼拝

●参加者●

Ariel G. Siagan (フィリピン基督教会協議会, 韓国延世大学大学院)

박혜린 (韓国基督教長老会)、최건희 (韓国監理教会)

稲益久仁子(日本基督教団、農村伝道神学校)片岡希望(日本基督教団、同志社大学)、貴志大龍(早稲田奉仕園)

金素羅(在日大韓基督教会)、倉富サラ(日本基督教団)、小糸健介(日本基督教団)、芝田陽治(日本聖公会)

崔恩(在日大韓基督教会)、鄭優希(国際基督教大学教会)、寺田ともか(日本福音教会)、新田紗世(日本聖公会)、

野田祥(日本基督教団)、付月(茨城大学)、白勝和(在日大韓基督教会)、三浦元吾(学生YMCA)

片岡平和(日本基督教団、早稲田奉仕園、マイノリティ宣教センター運営委員)

有住航(日本基督教団、立教大学、マイノリティ宣教センター運営委員)

藤守義光(日本キリスト教会、ウェスレー財団、マイノリティ宣教センター事務担当)

David McIntosh(カナダ合同教会、マイノリティ宣教センター共同主事)

金迅野(在日大韓基督教会、マイノリティ宣教センター共同主事)

●協力者(順不同)●

石橋真理恵(在日大韓基督教会)、朝治武(リバティ大阪館長)、金城宗和(地域史研究家・コミュニティリーダー)、

金哲(大阪第四朝鮮初級学校)、長崎由美子(朝鮮高級学校の無償化を求める連絡協議会大阪事務局長)、

宋悟・金和英(NPO法人クロスベイス)、小林明(部落解放センター)、金成元・李根秀、申容燮(在日韓国基督教会館)

Lecture 1

朝治武さん（リバティ大阪館長）



自身も被差別部落出身者である朝治さんは、ご自分の経験も含めて、大阪という地域性、とくに被差別マイノリティが歴史的にどのように形成されてきたのかを語られた。江戸時代に形成された被差別部落への差別は、現在も差別名鑑の流布などの形で温存しているし、たとえば、人と人を結びつけるもっとも基本的な形のひとつである結婚の際に、もっとも鋭く差別は表面化するという話を体験をもとに語られた。そして、植民地とされた朝鮮半島の人々のコミュニティ、沖縄からの移民のコミュニティが、近代都市化が進む大阪の周縁に形成された歴史について説かれた。併せて、光が宛てられることが少ない経済発展の犠牲となった下層労働者たちの寄せ場も、隣接する形で形成されたことを語られた。

差別を受けた朝治さんの身体から発せられた「差別はなくならない。しかし差別をなくすために必要なのは共感する力だ」という言葉が深く響いた。部落解放センターの小林明さんがフォーラムの現場を訪ねてくださり、関連の資料を提供してくださった。参加者の何人かは、全プログラムが終了した後、フォーラム期間中は休館のため訪問できなかった「リバティ大阪」へのオプションツアーに参加して学びを深めた。

Lecture 2

金耿昊さん（日本近現代史研究者）



「人類館」は、1903年大阪の天王寺で開かれた「第五回内国勧業博覧会」の場外余興施設として設置されたもの。博覧会は、約37万6800㎡（東京ドーム8個分）の敷地に、農業館、林業館、水産館、工業館などの産業に関するパビリオンを配置すると同時に各種のアトラクションも設置し、会期の5ヶ月の間に訪れた人は500万人を超えたとされており、大阪の街のインフラや工業・商業の発展に大きな影響を与えた。近代的な帝国の威信を体現するかのような博覧会場の入り口付近に、「学術人類館」は設置された。「人類館」には、「北海道アイヌ」、「台湾生蕃」、「琉球」、「朝鮮」、「支那」、「印度」、「爪哇（ジャワ）」などの生身の人びとが「陳列」され、日常生活や歌や踊りなどが「見世物」として供された。この「学術人類館」はいったいなぜ作られたのか。「学術」という名前はなぜ必要だったのか。アメリカやイギリスやフランスではなく、なぜ彼らだったのか。そこに入場した人びとはどのような眼差しを注いだのか。そこに集められた人びとはどういう気持ちだったのだろうか。集められた国や民族の人びとはどのような反応を示したのか。この事件は、今日を生きる私たちに、関係のないことだろうか。数多くの図版とともに、多くの問いかけが心に残った。この講演ののち参加者たちは、「学術」や「産業」という一見暴力と関係ないと思われる言葉の中に「格差」に基づく「配置」の思想をかき取ることができるなどの意見を出していた。

フィールドトリップ1



安政大津波の碑の前で案内をしてくださる金城宗和さんとお会いし、私たち一行は現在は大正区と呼ばれる、19世紀末頃から沖縄出身の出稼ぎ労働者たちが生活してきた土地を巡った。1883年の「大日本紡績三軒家工場」の操業開始を皮切りに、沖縄から多くの女工たちが職を斡旋されて出稼ぎに来たという。戦前から仕事を求めて移住した「一世」とその子孫、また、戦後に職を求めてやって来た人々が折り重なって生活してきた。造船所や鉄工所などで働く労働者が多く、また水上運送を仕事とし、そのための平船である「はしけ」で水上生活を営んでいた人も多かったという。私たちが渡し舟に乗ってほんの少しだけ水上を移動した。かつてはこの運河の中で生活していた人たちがいたのだと想像しながら。

大正区役所にはロサンゼルス五輪金メダリストの具志堅幸司氏の記念碑がある。近くにはでいごの花やしゅろなどが植えられ、沖縄への想像力が刺激される。しかし、これまで、沖縄人（ウチナーンチュ）たちは自分たちの素性を隠すように強いられてきたという。姓や言葉遣いから沖縄にルーツがあることは容易にわかるが、金城の姓一つとっても、沖縄では「かなぐすく」と呼ばれていたようで、大阪に出たから「かなしろ」、「かねしろ」、「きんじょう」と、「より本土らしく、日本らしく」呼び方を変えてきたのだそうだ。案内して下さった金城さんも、幼い頃、単語レベルでの言葉の違いをからかわれることを何度も経験されたという。「朝鮮人・沖縄人オコトワリ」といった露骨な張り紙や、結婚、就職にあたって差別があったことなども同じ、現在、「リトル沖縄」とメディアでもはやされている地域の背景には、そのような歴史があったのかと絶句した。休業日にも関わらずご馳走と伝統芸能でもてなして下さった「うるま御殿」の皆さんに心から感謝したい。満腹のお昼を頂き、踊りと唄い、三線で共に盛り上がったが、これまで「隠す」労力ばかりを強いられてきた伝統に、新たな誇りを持って生きていくことができる時代は、まだ始まったばかりだ。別れ際に、国家とは何か、国民とは何かを改めて金城さんから問われた。

フィールドトリップ2・3



「リトル沖縄」の後、私たちは鶴橋駅前へ向かった。キムチや鮮魚、干物の匂いが漂っている。新鮮な豚肉の店もある。色とりどりの衣類・ブランドものや宝飾品、民族衣装も眩しい。戦後の闇市をルーツに持つ商店街から、生野コリアタウンまでは歩けない距離ではない。まずは生活感のある鶴橋駅前の商店街で小一時間を過ごした。その雰囲気味わった後、翌日、生野の朝鮮学校とコリアタウンを訪問した。また、近年ますます多様化する地域の課題に対し、差別と貧困のないまちづくりを模索するNPOクロススペースを訪ねて、宋さん、金さんにお話を伺った。

鶴橋駅前で行われたヘイトスピーチは記憶に新しい。1973年に行政的に消去されるまで、かつては猪飼野と呼ばれたこの地域は、歴史的に「渡来人」の多く暮らした地域だと言われている。1922年以降、済州島-大阪間の定期直行船が就航して以来、各種工場での出稼ぎや河川工事などのインフラ整備のために住み着いた朝鮮人たちがこの地で生活し、現在のコリアタウンを形成してきた。第二次大戦後、済州島や朝鮮半島に帰った人々も多かったが、1948年以降、再び多くの流入者があり、本国での戦火をよそに大阪の復興に労働者として参画してきた。朝鮮学校を訪問した私たちは、子供たちの好奇心と熱心さを肌で感じ、小学校に入って初めて朝鮮語に接する学童もいることなどを伺った。教員の多くは卒業生で、実習期間はほぼ無償ボランティアに近い形で教えているケースも稀ではないそうだ。朝鮮学校を取り囲むようなヘイトデモや就学支援金打ち切り問題は、学童たち、またその家族に大きな脅威となっている。現在、生野区には中国やベトナムから移住してきた多地域のアジア系住民が生活しており、いじめや差別、言語や生活習慣上の課題も多様化している。NPOクロススペースでは、1対1の学習支援、生活支援を基本としたサポート体制の構築を始めているという。偏差値一辺倒の塾教育とは違った、血の通った学習支援の試みの萌芽に私たちも触発されるところが多くあった。「多文化共生」の持つ実際的かつ実存的なニーズに取り組む姿からは、前日の「学術人類館」に関する学びや、人権、とりわけ同和問題に関する朝治さんの発言と共鳴しながら、私たちが次にどのような方向へと歩み出すのか、問いかけられているようにも感じられた。会場を提供して下さった在日韓基督教大阪教会に併設する幼稚園に「猪飼野」の地名を見ながら、私たちの感受性はようやく開かれたつづであった。私たちのフィールドワークがかつて「学術人類館」で行われたような眼差しの暴力で終わってしまうのか、それとも、共に声を上げていく共生の歩み、連帯の営みとなるのか、一人ひとりがその胸に問いを抱えながら、その後のアウトプットの時間を迎えた。
(フィールドトリップ記録：芝田陽治)

WORKSHOP 1 見て、聴いて、語りあったことを、身体で表現してみる

ユース・フォーラムの準備過程で、わたしたちは、差別について学ぶと同時に、何をどのように受け止めたのかを、言葉に限らず、さまざまな次元の「コトバ」で表現できないか議論した。そこで、フォーラム期間中に予定していたワークショップのひとつを「演劇ワークショップ」の手法を取り入れることとした。2015年に開かれた第3回マイノリティと宣教国際会議のユース・フォーラムでファシリテーターを引き受けてくださった花崎攝さん（武蔵野美術大学）から、アウグスト・ポアールの「被抑圧者の演劇」の思想を学んだ。「言葉」を持たない／奪われた民衆の「コトバ」としての演劇をヒントに若者たちがフィールドワークや講演を通して見て、聴いて、感じて、語り合ったことを表現してみた。有住航さん（センター運営委員）がファシリテーターを担当した。



●ワークショップの流れを以下のように想定した。

①ワークショップの目的の説明、②ウォーミングアップとしてカードに記されたテーマについてグループで討議して身体をとおして表現する。たとえば、椅子、飛行場、動物園など。最初はテーマ性の薄いテーマを選ぶ。③フォーラムのプログラムに即したテーマを提示する。今回は差別、暴力・・・などを用意した。④グループごとに発表し互いに講評し合う。

●実際に起きたこと

今回は、フォーラムの中で参加者から聞かれた言葉の中から「暴力」が選ばれた。「暴力」というゴツゴツとした言葉をどのように表現することができるのか。4つのグループに分かれて、短い演劇をつくる作業を行った。しっかりと作業の時間をとったあと、順番に発表し、発表された演劇の意図について語り合った。「暴力」についての短いストーリーを準備したグループから、「暴力」を一枚の絵のように表現するグループまでスタイルは様々であったが共通点も見られた。4つのグループに共通して表現されていたことのひとつは、物理的な打撃によって振るわれる暴力だけではなく、「言葉」や「振る舞い」によって生み出される構造的な暴力への気づきである。あるグループでは、誰かが殴られている状況をインターネット越しに閲覧し消費する人、目の前で暴力が振るわれていることにまったく気づかず笑顔でスキップしながら通り過ぎる人が登場した。また別のグループでは、自分の背中を踏みつけられていることに気付いていないのかのように笑顔でピースサインをする姿、そのような状況を前にまったく別の方向に向かって（目を背けるかのように！）熱心に祈る姿が表現されていた。

共通するもう一つの点は「見ることの暴力性」である。いくつかのグループの発表では「スマートフォン」が効果的に用いられていた。暴力が振るわれている現場を携帯のカメラで撮影している人、そうしてアップロードされた動画をインターネットで眺めている人がいる。わたしたちは暴力を「カメラ」や「モニター」越しに「見ている」のだ。そのような「まなざし」は、自分たち自身にも向けられる。あるグループは、観客であるわたしたちが「展示」され、見られ、消費されているように感じるように舞台を演出することで「見られること」の居心地の悪さ、「見ること」の暴力性を表現した。

それぞれのグループの演劇は、あらゆる暴力のあり方を浮き彫りにしていた。4つのグループが共通して表現した「暴力の重層性」と「見ることの暴力性」は、もちろん前日の「人類館事件」の学びから着想を得たのだろうし、あるいはインターネットにおける近年のヘイトスピーチの問題が想起されたからかもしれない。もっと言えば、「フィールドワーク」という名分の下に「見学」を続け、一方的に「まなざす」わたしたち自身への問いから導かれたものかもしれない。

●ファシリテーターとして感じたこと（民衆演劇運動との関連で）

演劇ワークショップは「演劇」をつくることが目的ではない。演劇をつくり表現するプロセスを通じて、思いや経験を分かち合い、言葉や出来事に意味を与え、それを分かち合い、「現実を変える」ためのリハーサルとして行われるものである。単なる「演劇づくり」にならないために、プログラムの中で話題・争点になっていることや参加者の言葉を注意深く聞き、それを臨機応変にワークショップに結びつけていくことが大切であろう。参加者がワークショップの意図をしっかりと理解し、受け止めてくれたことに心から感謝したい。演劇ワークショップにとどまらず、新しいワークショップの手法を考案し実践し共有していくことをマイノリティ宣教センターのはたらきのひとつとすることができればと思う。

WORKSHOP 2 内と外の見えない差別をみつめるための教材をつくる

フォーラムでもう一つチャレンジしたのは、差別について扱う教材の開発であった。5月にドイツのEMS（連帯する福音主義の宣教）の呼びかけで、センターは、ドイツ教会デーで反差別にかかわるプレゼンテーションをおこなった。その時に出会った社団法人『顔を見せろよ!』が開発したカードゲームをフォーラムのワークショップで実践してみた。内と外にある差別に気づいていくカードゲームはすでにドイツの教育現場で実践されている教材。運営委員の菊地純子さんにアドバイスをもらいながら、日本版の作成にむけての開発のプロセスに位置づけた。参加者には、ワークショップの体験というだけでなく、教材の開発という視点をもてもらうように心がけた。ファシリテーターは、運営委員の片岡平和さんがおこなった。



●カードゲームの概要説明

このカードゲームのタイトルは「白人にラップはできない～先入観や決まり文句に抗う態度決定ゲーム」。このゲームには司会者が使う2種類の色分けされたカードが24枚あり、一方には深刻な偏見が載っている、もう一方にはそれほど深刻には受け取られない先入観が載っている。カードの裏にはその言葉の背景を説明し、偏見にはデータも用いて反証している。参加者は司会者が挙げたカードに対し、10枚の態度決定カードの中から自分の態度を表明する。このゲームを通じて、一般に流布している先入観や偏見に満ちたステレオタイプを可視化し、そういった考えや発言は多くの場合、無知や誤解に基づいていることが確認できる。

●具体的におこったこと

はじめにドイツ版でカードゲームを体験した。排外主義に基づく移住者への偏見は日本でもドイツでも共通しているが、私たちにはすぐに理解できないドイツの状況に注目するため、以下の二つの例を挙げたい。「誰でも宗教を自由に信じて活動してよい」というカードの裏には、これまでドイツではキリスト教の祝日のみが休日となっていたこと、近年はイスラム教の祝日も休日となる協約を作った州があることが書かれている。また「学校の休み時間の校庭ではドイツ語だけが話されるべきである」という若干驚き、身構えるカードの裏には、ある学校の生徒数の90%に移住背景があり、多くの異なる母国語ではコミュニケーションが取れないため、教師、親、生徒と一緒に考えて、この規則を決めたこと、これまでにこのドイツ語義務が生徒たちに肯定的に受け止められており、生徒間の衝突が減少していることが書かれている。ドイツ版を体験し、必ずしも偏見や差別的とは言い切れない社会状況の違いや人びとの取り組みの違いがあることを念頭に置いた。

そして、日本や海外参加者の身近にあるステレオタイプや偏見を書き、このカードゲーム作りのワークショップを行った。カードには、軽い内容のもの（血液型や〇〇という先入観）とハードな内容のもの（ヘイトスピーチは表現の自由、〇〇という偏見）を書いてもらった。裏には解説と反論を書いて、一人ずつ自分のカードを発表し、参加者は態度決定カードを掲げて、カードゲームを体験した。

●わかったこと

実際にワークショップをやってみて分かったことは、このカードゲームがコミュニケーションとして優れた方法だということだ。先入観や偏見をカードに書き、可視化することで私たちが何を聞いているのか、発表者が何について話しているのか、そのポイントが明確になる。また、反論も3点以内にまとめていて、簡潔であるがゆえに話しやすく聞きやすい。時間の制限も影響しているかもしれないが、発表は全体的にリズムカルで活発な雰囲気常にあった。参加者は「それ、よく言われるよね」「あるある」と納得しながら、さあどのように自分の態度を表明するか、反論するかを考える。私たちは普段からいかに多くの先入観や偏見に囲まれているかが、ワークショップの中で理解できるようになった。

さらに、今回は海外参加者から韓国の移住者や野宿者の状況を知るきっかけとなった。多様な背景を持つ参加者が一人ひとりの活動や身近にある状況を説明することで、お互いを深く理解し出会っていくことができた。

朝と夕の祈りの中で語られた証言／声たち

フィールドワーク、講演、仲間との語らいを通して引き出された言葉たち。
フォーラムの参加者が語った言葉の断片をひろいました。

…高校生活は毎日が充実していました。寮や学校で友達もでき、部活も楽ではありませんでした。濃密な時間を過ごしていました。部活の練習をしていたある日のこと、周りに対して厳しかった私は、同級生のプレーに腹を立て怒鳴りました。すると返ってきた言葉は「うるせえ！このヒバクシャ！」私は瞬間的に怒りを彼にぶつけていました。

「自分は差別問題の当事者にはなりえない。」そう思っていた子ども時代でしたが、それは間違いであったことに気づかされました。差別は時代が進むにつれて、新たに生み出されていくものであると私は考えます。事実、私が受けたようなそれまでになかった「原発被災者差別」によって少なくない人が傷つけられています。今後も新たな差別が生み出され、その被害者に自分なるかもしれないという不安定の中に私たちは生きているのだと思います。またそれと同時に、私たちが気にもとめていない言動によって現在傷ついている人がいるかもしれない、という想像力を常に働かせる必要があるのではないのでしょうか。……

…表にたたく、静かに悶えながら埋もれていってしまう人々が大半で、それは地球の裏側とかそんな遠くにいる話ではなく、もしかしたらすぐ隣の家で起きているかもしれないと思う事が必要なのかもしれません。それで、悲劇の度合いで語られるのではなく、その人の体験をポロッと言い出せるような機会がもっと増えたらいいなと思います。自由に掃き出せて、なんで？、どうして？と疑問を言えて、受け止めてもらえるような、そして自分自身も、受け止めてあげられるような、そんな行いをこれからも続けていきたいと考えます。

…朝治さんから『差別はなくならない。しかし差別をなくすために必要なのは共感する力だ』というお話を聞いた。この言葉を聞いた時、私の頭に浮かんだのは、ヘイトスピーチを繰り返す人々の顔だった。…

差別をなくすために必要な「共感する力」。おそらくヘイトスピーチに反対する多くの人々がヘイトスピーカーたちに自分たちに共感することを求めるだろう。しかし同時に、私たちが彼らに共感することはいかにして可能なのだろうか。ヘイトスピーチが行われるようになって、私の街ではしきりに「共生」が叫ばれるようになった。しかし、そこにはいつも主語がない。私たちは一体誰と共に今を、そしてこれから生きるのだろうか。実態を忘れた字面だけの「共生」は空虚であり時に暴力的だ。

誰かと共感すること、共に生きることを考える時、私達はきっとそこに横たわる痛みを無視することはできない。むしろ、時に相手を削り、自分を削られながら生み出される傷を通してしか「共感」することはできないのかもしれない。そのような誰かの傷の記憶や、そこで語られた言葉、静かなまなざしは、もしかしたら私たちにずっと何かを発し続けてきたのではないだろうか。それは人類館から。大阪に生きるうちなんちゅの歴史から。1948年4月3日の済州島から。

…それから、釜ヶ崎の夜回りや炊き出しに通うようになりました。戦争の準備を進めようとする政府の動きに、具体的に反対の声をあげるようになりました。すると、時々周りの人から、あなたの努力では社会は変わらない、神様の奇跡を信じて祈る信仰を持ちなさい、というようなことを、言われるようになりました。わたしの努力だけで社会が変わらないことは、確かにそうだと思います。でも、わたしにとって、奇跡を信じるということと、具体的に動くということは、同じ意味なのです。動くということは信じるということであり、わたしにとってひとつの祈りでした。だから悲しかった。……

でも、わたしにはわたしの信仰のあり方がある。教会との関係に悩んでいたとき、釜ヶ崎で出会った本田神父という人が、こんな話をしてくれました。「からしだね一粒ほどの信仰があれば、山に向かって動けと命じればその通りになる、というたとえ話。あれは、こういう風に考えることができる。スコップとバケツを持って、山の土を、少しずつ少しずつ運んで、木を切って、土を掘って、山を、切り崩していく。一人では山は動かないけれども、あなたが必死に動かそうとしているのを見て、やがて手を貸してくれる人たちが現れる。そうして、少しずつ、山は動く」。

腹の底にすんと落ちた感じがしました。スコップとバケツを持って山の裾野に出かけようと思います。そこで、たくさんの人と苦楽を共にする生き方を、わたしは選びたいと思います。母教会の人たちが、差別や貧困や、それぞれに抱える苦しみの中でもがき、祈り、守るよう守ってきた信仰のあり方を、わたしは否定したくない。でも、だからこそ、天国だけに希望を抱くのではなく、今ここから、差別の山の端っこを、信仰を持って、少しずつ、少しずつ、切り崩していきたいと思います。

私は昨年（2016年）学内で性差別発言の事件と、デート暴力事件をきっかけに、加害・被害の事実を学友たちといっしょに明らかにしました。私たちの神学大学が回復するためには、問題を互いが確認し、解決のための代案を整えなければならないと思ったからです。…この事件を通して私たちがともに知り得たことは、根本的な性差別の文化は、加害者と被害者だけの問題ではなく、私たち全体にかかわる事柄であり、すなわち、みんなが変わらなければならないという事実でした。なぜなら、その事件ののち、加害者と被害者は、それぞれ自分の名前の後ろに加害者、被害者という修飾語がついてまわるようになったからです。…私は、このことを組織し責任を担った立場にいたために、…自分では「いのちをたすけるのだ」というつもりで始めたことが、正反対になりつつある過程を見過ごしていなかっただろうか。自問しました。…依然として女性神学生として韓国社会で生きていくうえには、関連する暴力が待ち受けているように思われます。しかし、違いを知り、尊重できるとき、私たちは、決して孤独にならないことを、このフォーラムの場で学ぶことになりました。…

からふるカフェ Colorful Cafe の予定

外国にルーツを持つキリスト者を招き、エスニックマイノリティの声に真摯に耳を傾ける場です。

- 第2回 11月30日(木) 18:30・小島ひろみさん(日系3世としてペルーで生まれる。3歳のとき来日。大学生のときに日本国籍を取得した。)
- 第3回 12月14日(木) 18:30・エパデ・ダン愛琳さん(大学生。父はナイジェリア人、母は日本人。)
- 第4回 1月11日(木) 18:30・魯孝鍊さん(韓国生まれ。バプテスト連盟の牧師。)
- 場所:マイノリティ宣教センター

CMIM カフェの予定 (④~⑥)

シリーズ:他者と出会う旅へのお誘い

- 第4回 共生とヘイトの街を歩く 川崎・桜本編
12月16日(土) 14:00~ 川崎市ふれあい館集合
案内人:鈴木健さん(川崎市ふれあい館)
- 第5回 共生とヘイトの街を歩く 新大久保編
1月27日(土) 15:00~ 第二韓国広場8階に集合
案内人:金朋央さん(コリアNGOセンター)
- 第6回 街を歩いて感じたこと
2月24日(土) 15:00~ マイノリティ宣教センターに集合。
いずれも、エスニック・レストランでの交流会を予定しています。

■人種主義を考える教材をつくるプロジェクト企画■ 実際に教材を体験するワークショップを開催します

センターでは、ドイツのNPO『顔を見せろよ!』が作成した人種主義を考えるカードゲームの日本版を作るプロジェクトを立ち上げます。プロジェクトをはじめると同時に、教材を体験してみるワークショップを開催します(ワークショップの詳細は本文6ページを参照してください)。「常識」の落とし穴や、一見ステロタイプと見えるカードも、状況によって変わってくる。いろいろな議論のきっかけになるこの教材を体験して、日本版教材をつくるプロジェクトにあなたも参加しませんか?

- とき:1月27日(土) 13:00・14:30
- ファシリテーター:片岡平和さん(運営委員・早稲田奉仕園)
- 場所:マイノリティ宣教センター

■聖書フォーラムはじまります!■



被差別の現場を訪ねながら、どのように聖書が読まれるのかを分かち合う新しい学びの場です。ノンクリスチャンの方がたを含めて、さまざまな試行錯誤を積み重ねながら、不寛容な心が広がりつつあるこの時代を生きる確かな軸を分かち合えればと思います。第三回は、一、二回を受けて、人種差別撤廃デーに向けた祈りを編み上げます。

- 第一回 2018年1月 東京・日暮里で聖書を読む
- 第二回 2018年2月 川崎・桜本で聖書を読む
- 第三回 2018年3月 人種差別撤廃のための祈りを編む



活動日誌 (9月~11月)

- 9/14・10/24 マッキントッシュ共同主事がカナダを訪問。
 - ・カナダ長老教会・カナダ合同教会の総会事務局を複数回訪問。報告・協議など
 - ・オンタリオ州(3回)・ノバスコシア州(2回)で、主日礼拝メッセージ
 - ・教区主催の特別集会や、定期牧師会に招かれた(3回)
 - ・長老教会女性宣教会の地域集会に招かれた(2回)
 - ・合同教会全国女性会の年次総会に招かれた
 - ・カナダ西海岸の先住民の視点から歴史を学びなおす「KAIROS Blanket Exercise」に参加(次号で紹介)
- ・9/3~6 第一回マイノリティ・ユース・フォーラムを大阪で開催。
- ・9/12 宗教者9条会議(広島)参加(D)
- ・9/21-22 日本YMCAスタッフ研修にて、キリスト教入門講座講師担当(K)
- ・9/23 MIC かながわ主催、医療通訳ボランティア養成講座にて多文化共生について講演。(K)
- ・9/30 B作業部会開催。
- ・10/13 宗教者平和ネット集会参加。(K)
- ・10/18 日本YMCA訪問。
- ・10/19 早稲田教会 NOON SERVICE にてメッセージ(K)
- ・10/24 カナダ合同教会パーティ・タルボット氏来館。
- ・10/25 日本YWCA訪問。
- ・10/26 C作業部会開催。第3回運営委員会開催。からふるカフェ開催。
- ・10/28 ユース・カフェ③「私たちが見て、聴いて、話し合ったこと」開催。
- ・11/2 反ヘイト院内集会、対策会議参加。(D)
- ・11/3 9条改憲NO!全国市民アクション11.3国会包囲行動参加。(D)
- ・11/8 青山学院大学淵野辺キャンパス礼拝にてメッセージ。(K)
- ・11/9 全国市町村国際文化研修所にて、多文化共生に関する講演。(K)
- ・11/16 日本YMCA、日本YWCA合同祈禱会にてメッセージ。(K)
- ・11/18 NCC 障がい者と教会問題委員会主催、障がい者週間集会にて発題。
- ・11/29 第2回理事会開催。

会員になってセンターを支えてください



マイノリティ宣教センターは、
①人種主義との闘い、②ユースプログラム、
③和解と平和のスピリチュアリティ開発、
④日本教会・海外教会への発信を使命として活動を展開していきます。

この活動は、日本の教団・教派・キリスト教団体によって理事会を構成して、さまざまな立場や実践を展開されている方がたとの真摯な対話を通して、「マイノリティに誰が入るのか?」という大きな問いを噛み締めながら「天幕を広げ」つつエキュメニカルな活動として練り上げていくものです。

すでに、海外教会をはじめとして、熱い賛同と数多くの支援の意志が示されています。

ぜひ、会員になって、排外主義に対抗するエキュメニカルな運動の拠点としての「マイノリティ宣教センター」の活動を積極的に支援してください。

- 個人会員:年会費 一口 3,000円
- 団体会員:年会費 一口 10,000円
- 郵便振替口座
00160・6・487170
マイノリティ宣教
- 銀行振込
みずほ銀行早稲田支店
(普) 2382724
マイノリティ宣教センター